

平成16年7月1日発行(毎月1回1日発行)昭和11年7月2日第3種郵便物認可

国文学 解釈と鑑賞

特集

〈空間〉の言語表現

現代物理学と空間・時間／空間表象の形成と言語

日本語の空間表現から——移動動詞と空間表現／トコ・トチラ・トツチの意味

空間名詞と空間化／敬意の表明と空間性／空間的な意味から時間的な意味へ

述語の指示性／しりきれ形 *apocopated form* とメノマエ性

中国語と日本語の空間表現／地名と日本語／祭祀の場における時空間の遡及

指示の諸相——現代日本語のコンラ研究のために／古代日本語における指示語の射程

南琉球方言の空間表現／トルコ諸語の指示語／中国語の指示語から

タイ語の指示語／インドネシア語の指示語
追悼——林 大先生をいたむ 宮島達夫

SHIBUNDO

7

2004

第69巻7号

地名と日本語

— 河川地形名の言語空間

安部清哉

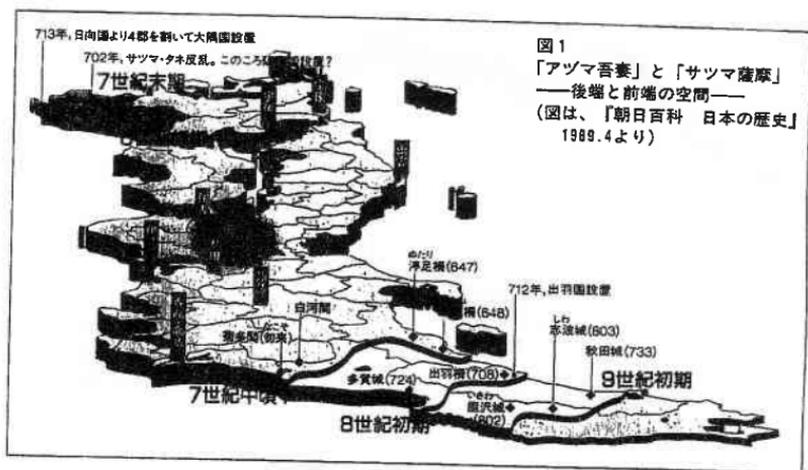
一 「空間」と日本語研究

日本語の歴史的研究は、個々の研究者が、「日本語」をどのように考え、その「日本語」の「空間」(時間を含め)といふものを、いつの時代からのどのような範囲として考えているかによって異なる様相を示す。

言語史研究上は、文献資料そのものが時代も地域も第一義的に規定しているように、一見見える。しかし、中央の文献資料のみによる「国語史」をいま別とすれば、言語史研究としては、資料が示している言語地域をどの範囲ととらえるか、時代毎の地域差をどのように考えるかは個々の研究者によって大きく異なり、それは古い日本語の問題でも同様であ

る。また、少し極端な例の方を挙げれば、世界的言語史研究で、一部の説ではあれ、文献資料の年代を溯った拡がりをも考察対象としている説があることにも、そのような研究者の視点や立場、学界のパラダイムが左右する一面を認めることができよう。

そのような抽象的な議論は紙幅の関係もあるので割愛するが、言語史研究が対象とする空間把握では、「地理的範囲」「時間(年代)」のほか、その範囲の拡大・縮小などの「方向性(ベクトル)」も重要な要素となる。これらの明確な視点設定、つまりは意識的理論的把握が必要かつ有効である。本稿では、日本語史研究におけるこれらの視点の再検討の必要性を、具体的事例によって示してみたい。



二 「空間」把握と地名解釈——アツマとサツマ(図1)

アツマ吾妻とサツマ薩摩という、古代史にも関わる2つの地名の語源は、各々ツマ端を共有する「後端・前端的」という対義語の変化形と解釈される(安部1999.2・2000.3)。

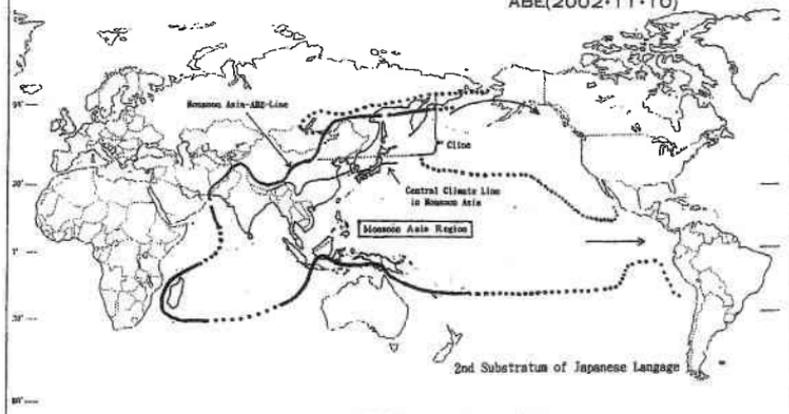
①アツマ adzuma←andzuma←anduma←antuma←atuma←ato・tuma (後端)

②サツマ satsuma←satuma←saktuma←saki・tuma (前端的)

古代史に詳しい方には容易に理解されるであろうので、この対の地理的關係について拙論では特に説明を付さなかった。その後、その關係が理解しやすい図1を得たので、地理的空間把握が地名語源解釈と関わる事例として挙げてみたい。

図1の九州北部から畿内までの空間を中央の軸と見ると、九州南部と「三関」以東の東日本(あるいは、図1のように東北以北——周知のようにアツマの範圍は歴史的にこの間で変遷する)とは、その中央地域から見て中央支配の遅れた「両端」に位置する「時代」があった。南九州がサキで東がアトという「方向性(ベクトル)」には、九州から畿内へという上層階層の何らかの史的前後關係の意識ないし史実(例えば「畿

Map2 (図2)
 Monsoon Asia Region & Central Climate Line in Monsoon Asia
 ABE(2002・11・10)



内東遷)を読み取ることが可能である(大陸や半島部を意識しての「前後」と見てもよい)。

この語源解釈の適否は置くとしても、この例からも、一時間(年代)「地理的範囲」「ベクトル」という弁別的観点からの空間的分析方法が、地名なり語源なり、ひいては日本語の新たな解釈を可能にしてくれることが理解できよう。この端と中央部(ここに朝鮮語日と同源とされる河川地形名タニが分布する(安部198:3))の二つの方言比較は、日本語史研究にとっても重要な課題である(安部199:5)。

三 河川地形名とモンスーン・アジア文化圏(図2)

二で、両端を除いて、日本語の中央語の行き渡った領域がある時期限られていることを見た。次は反対に、日本語の方言の世界が従来考えられてきた以上に広いという側面を示してみたい。筆者は安部2003.7・ABE2003.7で、日本語史研究の対象として、図2のモンスーン・アジア(MA)の領域を考えていく必要があることを述べた。この範囲には、河川地形名の「方言」としてのナイ(ハ*Name)や類別詞が分布するが、それだけでなく、次のような文化人類学的諸特徴が一様に分布領域をもつことを(おそらく世界的にも初めて)

指摘した。

《モンスーン・アジアの文化人類学的諸特徴》（分布図は安部HP参照）

- ① 「類別詞」Classifiersのアジア・太平洋での分布範囲
- ② 気候区域としてのMonsoon Asia

- ③ アジア・太平洋における夏季（七月）の降水量一〇〇ミリ以上の領域

- ④ アジアのchopping tools（打製石核石器群）の分布領域

- ⑤ ヤムイモ（温帯種・熱帯種）の分布領域

- ⑥ サトイモ科の分布領域

- ⑦ 酒類分類における麴発酵酒＋唾液発酵酒の分布領域

- ⑧ トラの本来の生息地域

- ⑨ アジアの植物区系

- ⑩ 中国の農耕領域

- ⑪ オーストロネシア語の源郷と拡散地域

- ⑫ ハツカネツミ（キャスタネウス型、HDP型を含む）の世界的分布領域

これらの現象には、MAという気候を背景とする共通性が認め得るから、これらの重なり合いは偶然のものではなく相互に密接な関連性がある、と結論される。その意味で、この

範囲を「モンスーン・アジア文化圏」と呼ぶことにしたい。

ところで、安部2003⁷⁾ではこの領域の言語・文化の研究にとつて河川（水源）地形名の研究が有効であることを指摘した。ここではMA中オーストロネシア語（AN）に確認できなかった上記ナイを補う意味でサワを取り上げ、MA文化圏における日本語のもう一つの広がりを確認してみたい。

四 サハ（川・湖沼沢湿地）とスガ（氷）（表一）

——類型的寒冷地意味特徴

河川名としてのサワは東に偏るが（鏡味完¹¹⁹⁸⁶、安部1986¹²⁰⁸も参照）、上代文献にあり西でも使われている。東西に広く使われるサワは、西に偏る外来のタニよりも古い。河川地形名サワの同源語を近隣言語に探してみようと思うが、その前にまず語形変化として存在可能な推定候補語形を、日本語内部資料による「内的再構成」によつて可能な限り事前に列挙してみたい（従来の系統研究での語形引き当てではこの点が不十分であった）。

サワsawaは古語としてサハsapaやsaΦaのほか、以下の一連の語形が推定可能となる（以下略述、詳述は別稿）。

sapaのk-rp交替語形として*saka、この二語形の祖形

として *sakwa を再構成可能 (「気候線」の北 k—南 p 対応
 (kw)。古く有音無声非弁別が推定されるので、*saba、
 *saga、*sagwa、それに現代方言のガ行鼻濁音の併存状
 況から *saba、*sagwa が推定可能。

ところで、上記 *saga に類似し意味的関連も認められる
 語に氷のスガ suga、siga が東北方言にある。川と氷とでは
 意味的連環が認めがたいように思われるが、次の三点からこ
 の語形も考慮すべきことがわかる。

①冬季長期寒冷地では小川・沼沢湿地は凍った状態で認知
 されやすくなる (認知論的解釈)。(川・湿地の類義語が多い中
 でサワが特殊化する可能性。なお、サワの古い意味は広く小川や
 沼沢湿地と解釈できる。『日本方言大辞典』『時代別国語大辞典』

②一方、「川↓氷」への表現上の意味転換も説明可能であ
 り、類例がある。「川・沼が凍ること」↓「水源 (川・沼)
 が凍った結果としての氷」へ。類似例 Ⅱ 大地から地震へのナ
 牛の意味転換。「大地 (ナキ) が揺れること」↓「大地が揺
 れることそれ自体」へ。

③同一語形が、寒冷地 (気候線以北、安部 1999:9) では、
 南側とは異なる寒冷地特有の意味で使用されるという南北方
 言の類型的パターンがある。(表 1 参照)

この氷の suga、siga は、東北方言の中舌母音では suga、
 siga となり、鼻濁音で suga、siga、siga、siga となり、ま
 た上記同様 *sugwa、*siwa、*siwa、*siwa など
 が推定可能。

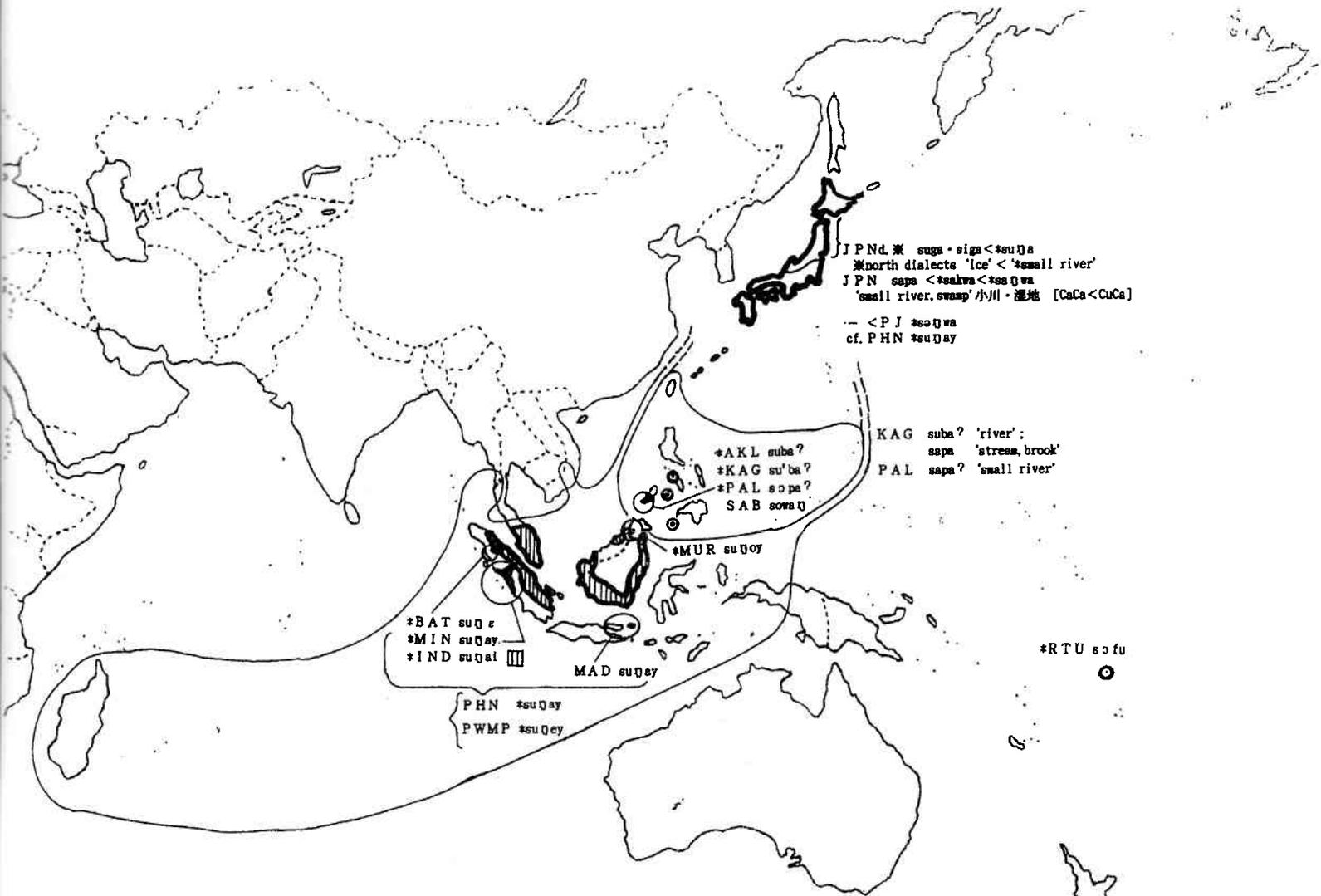
【表 1】南北日本方言の気候差による意味的類型特徴

①フキは安部二〇三、三参照

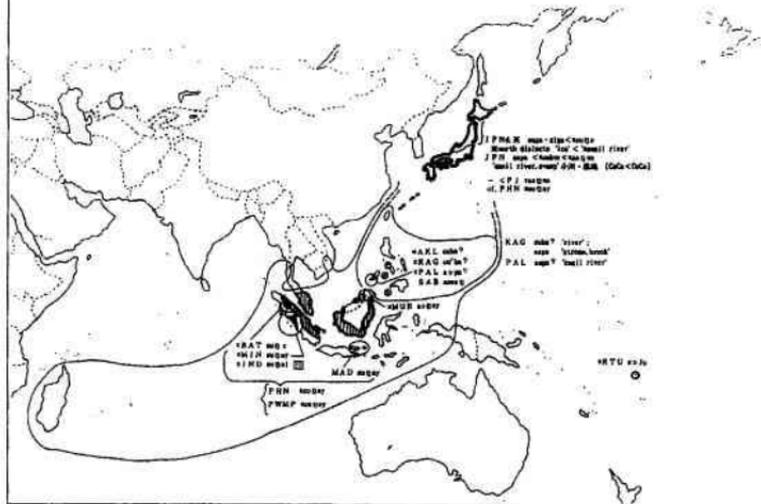
同語形	共通意味	標	標
①フキ (吹)	風 皮膚炎症 水源・水辺	有	無
②ユキヤケ		北日本の意味 (寒冷地特徴)	南日本の意味 (非寒冷地特徴)
③サワ・スガ	吹雪 凍傷 (霜焼)	水	風 日焼 [中古に複合語フキが生まれる] 川・湖沼沢湿地

Map3 (图 3)

Distribution of *səŋwa~*suŋay as 'small river' 小川 in Monsoon Asia
 ABE Seiya (2004.7)



Map3 (図3)

Distribution of *səjwa ~ *səjwa as 'small river' 小川 in Monsoon Asia
ABE Seiya (2004.7)

また、サハとスガの母音に着目すると、同一語源であれば、サワのCaCa、スガのCuCa (CiCaや中舌母音) の第1母音でu・üかi・iかaいずれかが、それぞれに現れる可能性も考え得る。即ち、一例のみu母音で挙げれば、*suba' *səjwa' *suða' *suwa'など。さらに、サハでもスガでも有声音においては入り渡りの鼻音、つまり、*samba' *sumba' *simba'などが推定可能となる (silng)。

これらを踏まえ、祖語形として、第一音節母音のa、u、ü、i、iを結合母音に仮にeを立て *səjwa' としておく (別案として北のüに周圍論を適用すると *sūjwa' としておく) と見るかも「方向性」の問題)。要するに、現代日本語のサハ、スガ、シガ三語形と日本語史や方言から「理論的に再構成し得る推定候補語形」は次のようになる。⁽²⁾

推定祖語形 Proto-Japanese (PJ) *səjwa (or

*sūjwa)

sawa' saða' sapa' suga' siga; *saka' *sakwa'
 *saba' *saga' *səjwa' *saga' *səjwa'
 sūga' siga' *suga' *sūga' *sūga' sūga' sūga'
 sūjwa' *sūjwa' *suba' *sūjwa' *suða'

suwa' *samba' *sumba' *simba' etc.

五 オーストロネシア語における小川 *suway (図3)

上記推定語形いずれかに類似する語形をMA文化圏に探った(安部2001:8)。大陸側にはいずれも未確認であるが、ANにおける図3の分布が得られた。図3を解説する紙幅はもはや尽きたので詳しくは機会を改めるが、ヘスペロネシア祖語PHNとして推定されている*suyaは上記PJ第2案*sujwaと酷似し、なにより図3中のgappaやsuaiは、サハ・スガとほぼ同形である(中でもHN北方語群にp・b形がある)。他の推定形が無駄だったのではない。それだけ同源可能性が高い語形が実在したことを示す。サワとANとのこの同源性を実証した先行研究は未だ見出していない。

六 日本語の多層性とひろがり——ナイ・サワ・タニ

地名と河川地形名を例に、範囲・時期・拡散方向の異なる日本語の地理的分布の多様性を見た。ナイ・サワ・タニの拡がり、列島内部でも、また、同源と推定可能な近隣言語でも、三語三様であった。MAを背景とするナイ、AN(HN)を背景とするサワ、東アジア半島部に同源語をもつタニ

が(おそらくはこの順序で)重層していると推定される(日本列島に入った時期、今の範囲に拡がった時期、「地名」として定着した時期は各々に検討する必要がある)。カワ、ヌマ、イケ、ヤチがさらにこれに加わっている。

ここに略述ながら見てきたところの「日本語」の諸層は、先行の「定説」や既存の言語史のパラダイム、また、先入観、「あり得ない」という予断、史観、それらすべてを一旦取り払ってたどりついた初めて見る「世界」である。それゆえ「日本語の故郷(ふるさと)」は、このMA文化圏にある。可否かはこれからの研究にゆだねられる。

冒頭の一文は、ここに示したMAとその中の一部である日本語“という相対化させた未知の「言語空間」に対して、読者それぞれの中に生じるであろう反応や批判の相違を、意味するものでもある。

[注]

(1) suwaには当該地名が見出せ、それは水と氷に関わって特異である。「諏訪湖」は巨大な水源としてだけでなく冬季の特異な氷結現象「御神渡」でも認知されやすい。諏訪の同源性から方言を探すと、「すわ 谷。湿地。新潟県佐渡」「日本方言大辞典」が得られ、谷の意はサワの方言とも一致する。これに

よって諏訪の語源 *sugwa (湖が追加) が裏付けられ、一連の「内的再構法」の妥当性も裏付けられた。

(2) この我々の理論 (MA 言語成層論) は、さらさらにこれらが特に北方で一音節化した場合を推定する (参照 na) *nahdi. 安部 2003. 7). 例えば *sawwa > *san^{wa} の一音節化からは *san' *sat' *sad' *sar' *sa が推定可能となる。この理論的推定語形によって sar (葦原・湿地・アラス語) 'sar·sa (「沙」) *水辺の砂、中国語「沙(砂)とは水中の散石なり。」「説文) ' *sar (沼地帯、「ハシ語」Slawik) が、この理論的射程範囲に入っている言語である。このことを確認する) となる。(詳述別稿)

【参考文献】(抄録。関連文献や地図は拙論を <http://page.freet.com/abeseiya/> (参照) (原)

鏡味完一 (1958) 『日本地名学』 東洋書林書房

あへせや (1997) 『日本語のルーツを探ったら』 アリス館

Seiya, ABE (2003. 7. 29) Dialectical \ climatic features and distribution of terms for watercourses in Asian languages : the case of Japanese, Korean, and Chinese, 'Proceedings of XVII International Congress of Linguists' in CD-ROM, Prague, CIL,

安部清哉 (1998. 3) 『日本語における a-i-u の東西対立境界線』

『関東・越後線群』 『立正大学国語国文』 36

同 (1999. 5) 『東西方言の諸相と日本語史の課題』 『日本

語学』 18-5

同 (1999. 9) 『日本列島におけるもう一つの方言分布境界線「気候線」』 『玉藻』 35

同 (2001. 8) 『東アジア (日本語・韓国語・中国語) の河川地形名の偏在と方言分布・気候との相関』 『韓国日本學會 (KAIJ) 第63回學術大會 Proceedings』

安部清哉編 (2003. 3) 『日本語の方言分布境界線 (関越線・気候線) による方言の重層性に関する基礎的研究』 平成 13・14 年度科学研究費成果報告書、私家版

安部清哉 (2003. 7) 『関東における日本語方言境界線から見た河川地形名の重層とその背景』 『国語学』 54-3

安部清哉 (2003. 7) 『関東における日本語方言境界線から見た河川地形名の重層とその背景』 『国語学』 54-3

同 (1999. 9) 『日本列島におけるもう一つの方言分布境界線「気候線」』 『玉藻』 35

【付記】 本稿は、平成 15-17 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) (課題番号 15520298) 代表者：安部) による研究成果の一部である。

〔あく・せいや 学習院大学教授〕

国文学解釈と鑑賞

平成16年7月号

目次

特集「空間」の言語表現

現代物理学と空間・時間	ニュートン・マッハ・アインシュタイン / 中村孔一	6
空間表象の形成と言語	天野 清	10
日本語の空間表現から		
移動動詞と空間表現	森田良行	19
ドコ・ドチラ・ドツチの意味	梅村博人	26
空間名詞と空間化	荒川清秀	32
敬意の表明と空間性	村田美穂子	39
空間的な意味から時間的な意味へ	開投動詞を「の場合」須田洋一	45
述語の指示性	指承篇の文法化と「コンソアリティ」 / 金田章宏	54
「しりぞかれ形」apocopated formと「モノ」マエ性	松本善丈	68
中国語と日本語の空間表現	方 美鳳	76
地名と日本語	河川地形名の言語空間 / 安部清哉	93
祭祀の場における時空間の遡及	奄美・沖縄の神謡から / 田畑千秋	101

指示の諸相

現代日本語の「コンソア」研究のために	根岸重紀	155
古代日本語における指示語の射程	『源氏物語』の「和歌」の「心あて」に / 上原作和	162
南琉球方言の空間表現	宮古多良間方言の「空間格」 / 下地賀代子	169
トルコ諸語の指示語	竹内和夫	180
中国語の指示語から	日本語との対照をかねて / 陳 鶯	188
タイ語の指示詞	「[NIN]「[NAN]「[NOON]」をめぐって」 / バドゥン・パッタノードム・オンウマ	199
インドネシア語の指示語	田尻亮二 / アフマッド・タヒヤイ	207
通称		
林 大(はやし・おおき)先生をいたむ	宮島達夫	213
新刊紹介		
米田利昭著「賢治と啄木」	遊座昭吾	216
近藤典彦著「一握の砂」の研究	平岡敏夫	217
酒井 敏著「森鷗外とその文学への道標」	大塚美保	218
通説 近代訳語を検証する	11 失禁・大便・秘結・夢精 / 杉本つとむ	219
本・人・出版社	沙羅書房刊 石田波郷「鶴の眼」 / 紅野敏郎	224
探照燈	鈍機翁冒險譚 / 谷沢水一	228